

貴大と共に 一ぼくのため
にありがとうー

office-k17

— 移植を前に、お世話になった方々への手紙から —

はじめまして、ぼくのなまえはこばたかひろです。お母さんからはなしはぜんぶききました。

ぼくのためにありがとう。

— 移植を前に、お世話になった方への手紙から —

この本は、短かったけれど、充実していた貴大の6年間を伝えたくて、私の記憶が鮮明なうちにと、綴ったものである。

障害を持って難病を抱えて生まれてきたことは、ある時期苦しかったけれど、それは決して不幸なことではなかった、ということはどうしても書きたいと思った。

それはきっと、貴大自身が一番望んでいることでもあると思う。

「苦しかったけれど、みんなに助けられて、支えられて、愛されて貴大は幸せだったよ」と。

もはや、それを伝えることが出来なくなった最愛の息子に代わり、感謝の言葉を伝えたい。

ぼくのためにありがとう

お母さん、ぼくがんばれるよ

昭和61年11月、私は妊娠7ヶ月の大きなお腹を抱えて、浜の町で買い物をしていた。3月1日が出産予定日となっていた子どもの、ベビー用品を買う為だった。病院の方針で性別は分からなかったが、どちらが産まれてきてもいいように、意識して黄色の物を探していた。もし、女の子だったとしたら、ピンク色を着せるのも可愛いかも。やがて産まれてくる子どものことを考えながらの買い物は楽しかった。あれもこれもと目移りした。

探していた物がなかなか見つからず、もう1軒行ってなかったら諦めて帰ろうと思っていた。あちこち歩き回ったせいか少し疲れてきたので、お腹をさすりながらいつもの調子で「お母さん行きたいところがあるんだけど、あなた、頑張れるかな？」と、まだ見ぬ我が子に語りかけてみた。すると、思いもかけず「お母さん、ぼくがんばれるよ」という声が返ってきた。

「えっ？」空耳かと思ってすぐさま周囲を見渡してみたが、親子連れの姿はなく、まして、子どもの姿などどこにもなかった。（お腹の中の子どもの声だったのかなあ。まさか...）早く子どもの顔が見たいという私の想いが、幻聴を聞いたのだろうと思った。しかし、幻聴にしてはやけにはっきりした声だった。“ぼく”と言っていたけれど、もしかしたら、産まれてくる子は男の子なにか？そんなことを考えながら帰宅した。

この日から丁度7年後に、最愛の息子と決別することになるうとは、この時は夢にも思わなかった。

あの子の最初の言葉が「お母さん、ぼくがんばれるよ」だったなら、最後の言葉は「お母さん、ぼく、もうがんばれない」であった。偶然だと思うが、とても不思議な気がする。

母と子は「母子一体」とよく聞かすが、貴大と私もそうだった。以心伝心というか、私はあの子の表情を見ただけで、何を言いたいのが読み取れたし、貴大は、言葉を使わず表情だけで、私に訴えることが出来るという特技を持っていた。その事は、貴大がまだ言葉を話せない時期と、無菌室で“苦しい”と言葉に出して訴えることが出来なかった時に発揮された。お互いの目を見つめて会話をした。